

生きる

～自分らしく そして、自由に～





友達とキャッチボールを楽しんでいた

中学2年生の頃

突然、右目に違和感を覚えた

日に日に視力が落ちていき、

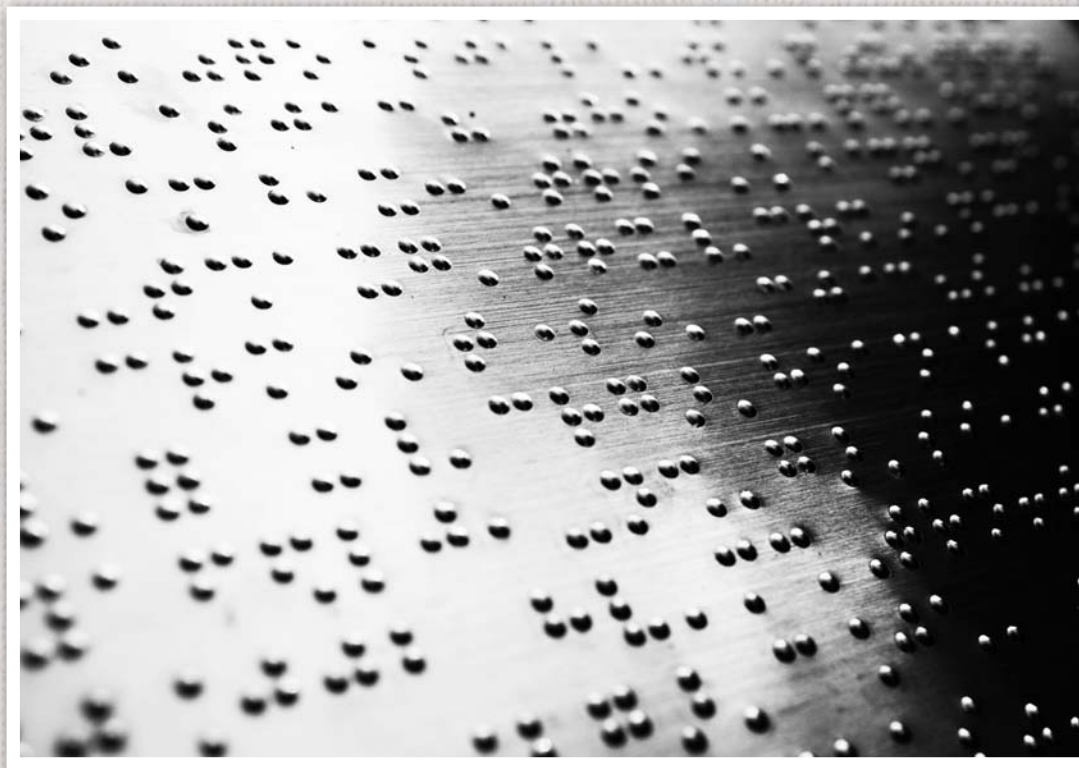
休学して入院

当時の医療では安静にするほかなかった

左目にも症状が出始め、

医師から「点字」の存在を知らされる

**「点字を勉強すれば、
不自由なく生活できるんじゃないか」
そう考えた
両目の視力を失う恐怖心にも負けず、
勉強するための一歩を踏み出した
戦後間もないころだった**

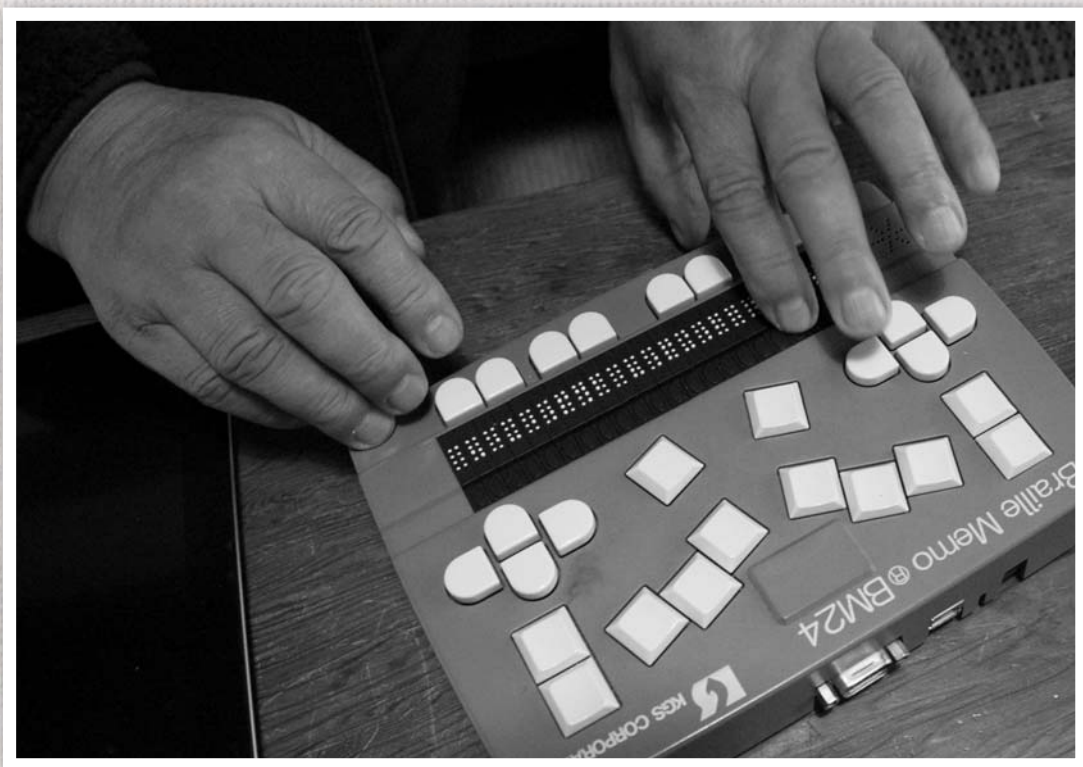




**盲学校では、
目が見えないことの不自由さを実感しながらも、
教員養成コースを経て卒業
鳥取の盲学校に赴任し、教鞭をふるった**

視力に障がいのある子どもたちに
勉強を教えることはとても難しい
自分と同じように全盲の生徒であれば
点字を使った授業でいいだろうが、
弱視のように少し見える生徒たちには、
個人に合わせた方法で
意志伝達する必要があった
全盲の自分が文字を扱うには、
他人の助けがなければできない
自力でできないということと葛藤しながら、
「文字の処理」が最大の悩みとなった





**コンピューターに関心を持ち始めたのは
この頃だった**

**コンピューターを使ってなんとか
目の見えない自分を補えないかと
考えたからだ**

**独学でプログラムを学ぶ一方で、
ひよんなきっかけで**

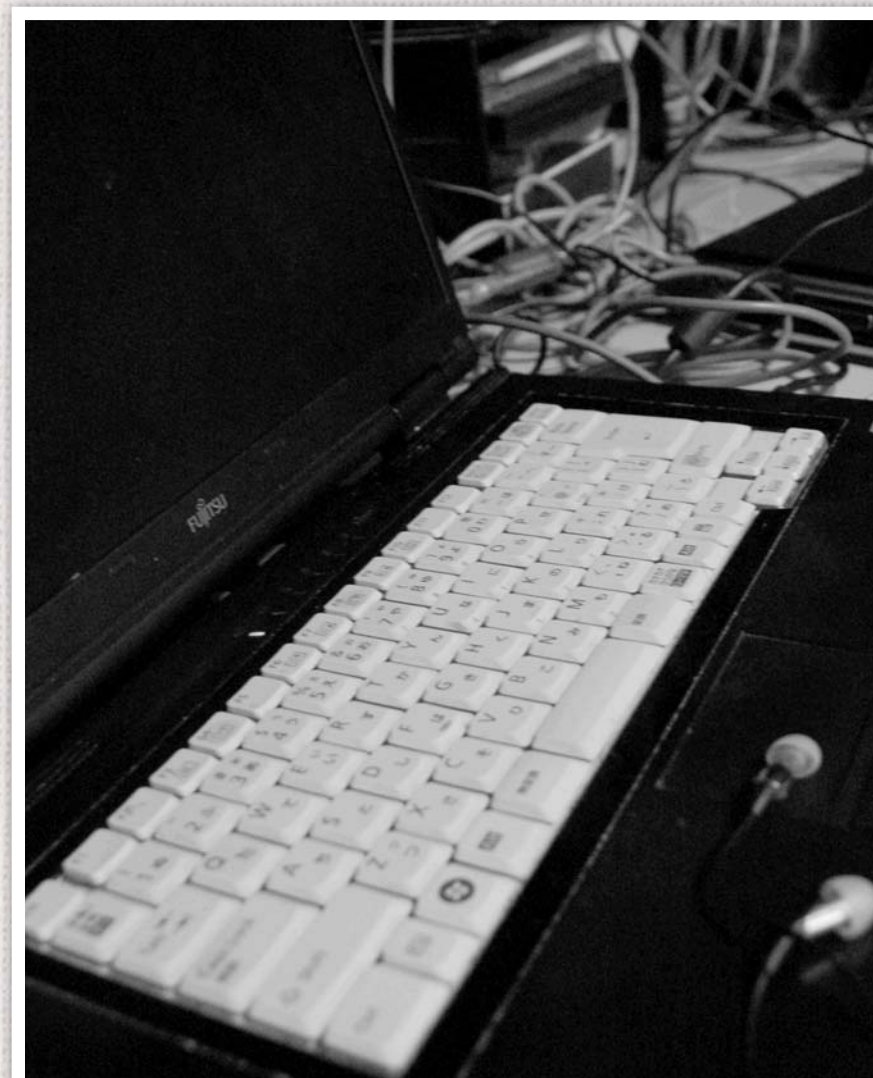
**大学で研究をしている専門家と、
大手コンピューターメーカーに
勤める社員の方に出会った**

「障がいのある方が

使いこなせてこそその情報機器だ」

この信念のもと、共同開発に取り組んだ

**「文字を入力し、画面に出た文字を
読み上げることができれば、
目の不自由な人でも会話ができる」
目指したソフトは、試作改良の末、
正式な商品として発売された**





最近では聴力も低下し始めた
生きていく上でコンピューターが
欠かせない存在となった
パソコンやスマホ、タブレットなど
デジタル機器が発達した今、
障がい者の生活スタイルを変え、
障がい者は『自分でできる喜び』を得た
それが自信につながり、
時に人の助けが必要な場合でも
卑屈にならず素直に受け入れられる、
そんな意識の成長もあった

さんじゅ
今年で傘寿を迎えた
今でも日々新しいアイデアを模索している
障がい者が
自分らしく
自由に生活でき
充実した人生が送れることを目指して





「視覚障がい」について

なんらかの原因により視機能に障がいがあることにより、全く見えない場合と見えづらい場合とがあります。後者の場合は ▽細部が分からない ▽見える範囲が狭い ▽光がまぶしい ▽特定の色が分かりにくい—などの症状が特徴です。

★こんな配慮がうれしい！

- ◇ 白杖を使用している人が困っていたら突然体にふれず、前方から簡単な自己紹介をしてから声をかける
- ◇ 「こちら」「あちら」などの指示語は使わず、具体的に説明する
- ◇ その人の「目」になる気持ちで接する

あとなぎ

視覚を補うためにデジタル機器を積極的に取り入れたアイデアと行動力には頭が下がる。高齢になった今でも新しいデジタル機器を購入し、視覚障がい者への活用策を考えている。取材中も「これが楽しみなんです」と笑顔を見せながら、点字のコンピューターやipadの特殊な使い方などを紹介してくれた。障がい者のライフスタ

イルを変えつつあるデジタル機器。日々進歩するこの技術が、彼が考えるような明るい未来を作ってくれと期待したい。(坂)